



真宗大谷派 本明寺通信

No. 2

2006年10月25日発行



## 本明寺永代経法要

5月28日(日)に本明寺永代経法要は行われ、多くの方々に  
ご参詣いただきました。午前中は雨に見舞われ少し心配でしたが、  
正午近くになり雨が上がったので、ホッとしました。

# 本明寺 行事報告

## ◆永代経法要（五月二十八日）

### 法話「二河白道の譬喩」

#### （意訳）

一人の旅人が西に向かって行くが、その道のりには長くはてしない。その旅人の行く手には、一つの細い道を挟んだ二つの河が見えてくる。細い道の南側に火の河、北側に水の河がある。その河の広さは百歩（約180m）に及び、深さは底無し、そして南北にはほとりがない。その水と火の河の真中にある細い道は、幅わずか四、五寸（約12～15cm）、この細い道は東の岸から西の岸までつながっており、その長さも百歩です。そして、水の河からは波浪が打ち寄せて道を湿し、火の河からの火炎は道を焼き、水と火の交わりは

一時も止むことがない。

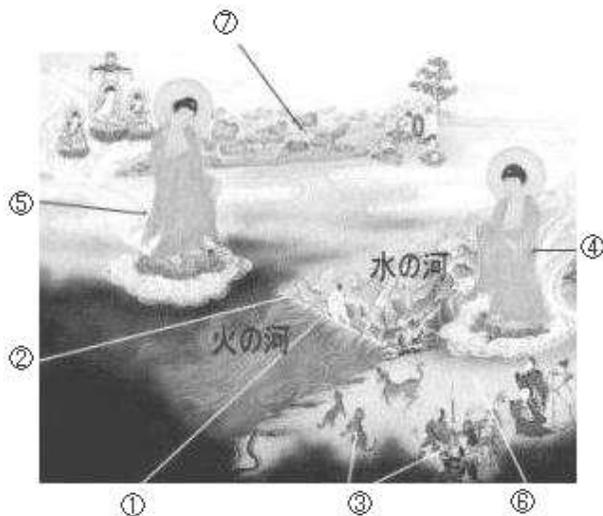
旅人が周りを見渡しても何もなく、人影さえありません。旅人が一人であることを見て、群賊・悪獣が旅人を殺そうと競って襲って来ました。旅人は死を恐れ西に逃げて行くが、すぐに水と火の二河に突き当たります。旅人は思った。

「この河は南に行っても北に行ってもほとりがない。真中に白い道はあるが、極めて狭い。二つの岸はそう遠くはないが渡れそうにない。今となっては、私は死ぬしかないのだろうか。来た道を引き返そうと思っても、群賊・悪獣が近づいてくる。南か北に逃げようとしても、悪獣や毒虫がこちらに向かってくる。だからといって、西に向かつて白道を進んでいけば、恐らくは間違はなく水の河か火の河に落ちることだろう。」

そう考えると、死の恐怖が全身にかけめぐった。そして

「今、後戻りすれば私は死ぬだろう。」

- ① 旅人
- ② 東の岸から西の岸につながる細い道（白道）
- ③ 群賊・悪獣・毒虫
- ④ 阿弥陀如来
- ⑤ 東の岸（此岸・娑婆世界）
- ⑥ 西の岸（彼岸・西方浄土）
- ⑦





だからといって、ここに止まっていても私は死ぬだろう。進んでいっても私は死ぬだろう。私が死をまぬがれる道は一つとしてない。どちらにしても死ぬしかないのなら、私はこの道を探ねて、前に向かっていこう。危険があつても、既に道があるのだから、なんと

しても必ず渡ろう。」

と心を決めた。するとその時、東の岸からたちまちに、

「あなたは、心を決めてこの道ですすんでいきなさい。必ず死の難はないでしょう。もし、ここにどまっていれば死ぬしないでしよう。」

と、白道を進めと勧めてくださる声が聞こえた。また、西の岸に人が現れ、

「汝、心をついに決め、正しく思いを定めて、直ぐにその道を進んできなさい。私がよく汝を護りましょう。ですから、水の河・火の河に墮ちることをおそれることはありません。」

と、喚んでくださっている。

旅人は、東の岸からの、この道を行くことを勧めてくださる声と、西の岸からの、この道を来いと喚ぶ声を聞き、正しく自らの身心に受けとめ、心を決めて道を探ねて直ちに進んでいった。恐怖心もなく、また、もどろろろという気持も生まれなかった。

旅人は一歩、二歩と白道を進んで行

くと、東岸の群賊等が

「もどつて来なさい。その道は陰悪で、とうてい対岸までたどりつきません。

必ず死ぬでしょう。私たちの誰一人として悪心など持つていません。」

と喚んだ。しかし旅人はその声を聞いても、全く振り返らなかつた。一心に直ちに道を念じて進んでいくと、間違ひなく西の岸に到り、永遠に諸々の難から離れ、善友と相まみえ、身心の底から変わることのないよろこびがわいてくるのである。

### (語句)

「東の岸」 煩悩が盛んで不安の多い娑婆世界。穢土。

「西の岸」 極楽世界。浄土。

「群賊悪獸」 衆生(自分自身)の身心と環境と、それを構成しているさまざま要素。

「何もなく、人影がない様子」 よき師に出遇えずにいる様子

「水の河」 貪りや愛欲の心

「火の河」怒りや憎しみの心  
「白道」浄土に生まれたいと思う心  
「東の岸の声」釈尊の勧めの教法。  
「西の岸の人」阿弥陀如来の救いの心  
「群賊等の声」浄土の教え以外の教法  
や、浄土の教えを誇るもの

(参考文献)

『浄土の真宗 真宗概要』

東本願寺出版部

金子大栄随想集 第四卷

『二河譬 求道の旅人』金子大栄著

雄渾社

『二河白道の譬え』寺川俊昭編

東本願寺出版部

(法話内容)

自分のことは自分が一番良く知っていると  
思うことがあります。はたして  
そうでしょうか？

私たちの生き方は自らの感覚や感情  
や考え方は正しいものとして、それを

頼りにして生きようとしています。そ  
してそれを苦しみであると感ずること  
はあまりありません。むしろ最近の考  
え方はそれが人間らしい、あるいは人  
間だから当たり前だと考えることが多  
いのではないのでしょうか。

この物語では、人間の感覚器官(眼  
耳鼻舌身意)によって与えられる情報  
(色声香味触法)群賊悪獣として譬え  
ていきます。群賊悪獣は私たちの外側に  
あるものではなく自らの身体の中に宿  
り、心を惑わし苦しめ正しい生き方を  
妨げるものに譬えられています。さら  
に貪りの心や瞋りの心、憎しみの心を  
火と水に譬え、危うい生き方を表現し  
ています。

このような自己の在り方に左右され  
て一生を終える悲しみを認識して深い  
慚愧の心を起こすことよって、初め  
て自己の心の中に微かではあるが求道  
心が芽生え(機の深信)、心もとない細  
い道ではあるが佛の教えに従って生き  
る歩みが始まるのです。そこにはお釈



迦様の勧める声と阿弥陀仏の救いの誓  
い(法の深信)が、私の生き方が悪道  
に落ちるような誤りを犯さぬような働  
きとして支えてくれることを常に忘れ  
ないで念仏申す生活を進めているので  
す。

人間は二度誕生しないと人間になれ



ないと言われています。一度目は肉体的誕生であり、二度目は精神的誕生であると言われています。宗教心によって目覚めた生き方をしてこそ、人間が人間として完成できるのではないのでしょうか。

(住職 本田隆見)

### ◆おみがき奉仕

(五月二十三日)

副住職企画第一弾のおみがき奉仕を行いました。今回は永代経法要に向けて行いました。

今回が初めてだったのでどれだけの方が参加してくださるのかが分かりませんでした。予想以上に多くの方に参加していただき、また電話にて参加出来ない旨をご連絡していただいた方もいました。本当にありがとうございます。

こんなに多くの反響はあるとは思わずこちらの準備が不十分だったことを反省しています。これからも多くの方に参加していただけるようにがんばっていききたいと思っています。ご協力お願いします。



### 参加者 (敬称略)

安藤 賢司  
川瀬 きぬゑ  
宝田 康子  
中澤 節子  
根岸 千栄子

# 副住職の大まかな活動

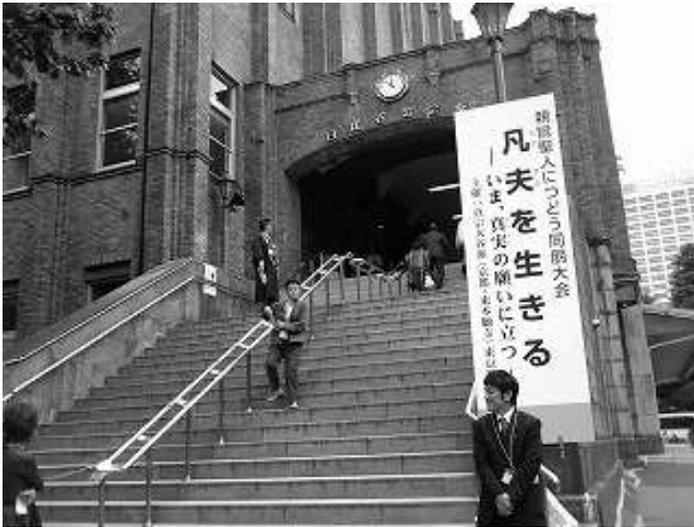
## ◆東京教区同朋大会（六月三日）

東京教区同朋大会の場外スタッフを勤めました。

今回の講師である廣瀬杲先生は、大谷大学・大谷大学大学院を卒業し、大谷大学教授を経て、大谷大学学長も勤められました。現在は大谷大学名誉教授になられています。

私は大学在学中に廣瀬先生の書かれた本を読んで、先生に対してとても興味を持ちました。お話を直接聴くことは初めてだったのでとても楽しみにしていました。

そこでの今回の講演のお話を、うまく伝えられるか分かりませんが、大まかに載せたいと思います。



テーマ 凡夫（ただびと）を生きる

—いま、真実（ほんとう）の

願いに立つ—

講師 廣瀬 杲 氏

講題 本願毀滅（きめつ）の

ともがら

ほんがんきめつ  
本願毀滅のともがらは

しょうもうせんだい  
生盲闡題となづけたり

だいじみじんこう  
大地微塵劫をへて

さんず  
ながく三塗にしずむなり

こうそうわさん  
（高僧和讃 真宗聖典 四九七頁）

（意訳）

本願を毀し滅ぼそうとする人とは、生まれたときから物事を見極めようとせずに（生盲）、自らの欲求を追い求めるため仏の教えを誹謗し、仏になる種がない者をいう（闡題）。

そのような人は、数え切れないほどの長い間（大地微塵劫）、地獄・餓鬼・畜生の三悪道（三塗）に苦しみ沈むのである。

(語句)

毀滅||毀—こわす、そしる、けなす

滅—ほろぼす、なくす

大地微塵劫||

三千大千世界(※1)を微塵にまで砕き、その微塵の一粒を一劫(※2)と数えて、すべての微塵を数えつくすほどの長い年月。

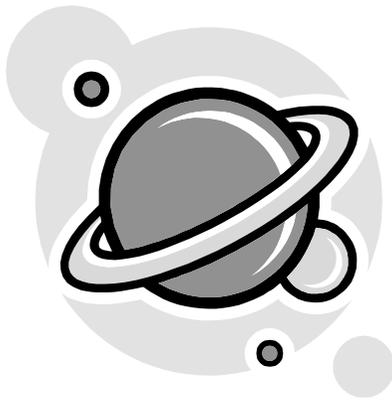
※1・三千大千世界||

この一つの世界が一千個集ったのが小千世界で、さらに、この小千世界が一千個集った世界が中千世界で、中千世界がさらに、一千個集ったものを大千世界という。この大千世界は、大・中・小の三種の千世界から成るので「三千大千世界」という。

したがって三千大千世界は千の三乗、十億の世界から成り、これが一人の仏が教化する範囲であるといわれる。

※2・一劫||

四十里四方もあるとても大きな岩があつて、その上に百年に一度天女が舞い降りて来て、天女の羽衣でサッとひと撫でして天にのぼって行く。百年経つとまた天女が舞い降りて来て、撫でて天に帰る。そうやって百年に一度繰り返し撫でて、その岩が少しずつすり減って行き、やがてなくなってしまう。そのなくなってしまうまでの時間を、一劫(いっこう)と言う。



三塗||

火塗—地獄の火に焼かれるところ

(地獄道)

刀塗—刀杖で迫害される場所

(餓鬼道)

血塗—互いに相い食むところ

(畜生道)

地獄道||瞋恚—自分の心に逆らうものをいかりうらむこと

餓鬼道||食欲—自己の欲するものに執着して飽くことを知らないこと

畜生道||愚痴—理非の区別がつかない

おろかさ

三塗とは「三塗の川」などの言葉から、「死後の世界」というイメージがある。しかし、三塗とは私たちが生きている現実、世界、生活のところにあるものだとおもう。



(講義要約)

「本願毀滅のともがら」とは、「毀」はこわす、「滅」はほろぼす。つまり「本願をこわし、ほろぼすやから」と言う意味である。この言葉は親鸞聖人が善導大師のお心にそって作られた和讃の一つである。

親鸞聖人は多くの著書を残しておられるが、「本願疑惑の罪」「本願疑惑の行者」という本願を「疑い惑う」という言葉はあっても、「本願毀滅のともがら」という本願を「こわす、ほろぼす」という言葉はこの和讃一首だけである。この「本願毀滅のともがら」という

呼びかけは、私たちに向けられた言葉であると思う。

まず、本願を頂くとはどのようなことか。そのことについて、曾我量深先生の二つの言葉を紹介したい。一つ目の言葉は

**お聖教を学ぶ、真宗の法を頂こうと真剣に思うならば、聖典と新聞と、この二つを真剣に読みなさい。**

という言葉である。聖典は仏教のもの、新聞は俗世間のものである。お聖教を学ぶ、真宗の法を頂く上では聖典を読むことはもちろんだが、なぜ立場の違う新聞を読むのかと疑問をもった。二つ目の言葉は

**阿弥陀様は本願を起こして私たちを救ってくださると言うけれども、その本願とは私たちをまず人間にしてください。人間にしてください。そして仏にしてください。**

から、**阿弥陀様の本願は二段構えである。**

という言葉である。私たちが「本願によつて救われる」という事を解釈するときの意識は、「私が本願を信じ、本願によつて救われる」というように了解してしまふ。しかし曾我先生は「私たちを人間にしてください」といっている。それは私たちが「人間ではない」と言われているのである。

それは、新聞に書かれている諸問題をみれば解る。新聞に書かれている諸問題は私自身には直接関係はないかも知れないが、私たち「人間」としての問題であることを理解しなくてはいけない。本願は「人間になりなさい」と言っているが、私たちが作り出している問題を見てみると、私たちは「人間である」と言えるだろうか。私たちは「人間」ではなく、ヒト科の動物に過ぎない行動をしているのではないだろうか。そのような行動を繰り返して

る私たちは「人間になりなさい」と言っている本願に逆らって生きているのではないだろうか。だから親鸞聖人は、親鸞聖人を含めた私たちのことを「本願毀滅のともがら」と言い表したのだと思う。

### ◆東北連区

#### 児連教化指導者研修会

(五月十七日～十九日)

テーマ 「いのち」

いのちは誰のものか

講師 戸次 公正 氏

大谷派児童教化連盟・出版専門委員

東北連区(※1)で行われた児連(※

2)の研修会に参加しました。今回の会場は山形県酒田市でした。研修内容は、先生による講義、絵本などを読むときの技法、野外ゲームの体験などでした。講義を通して「自分に子どもができてから児童教化を考えるのではな

く、将来産まれて来る子自分の子どものために、いま児童教化を考える」と思いました。また、座談会である方が言った「青少年たちの行動は社会の姿を具現化して見せている」という言葉が印象に残りました。

※1 奥羽・山形・仙台・東京・三条・

高田の各教区の集り

※2 正式名称「児童教化連盟」

簡単にいうと、各教区ごとにお

寺の人が集って子ども会などを

主催しています

### ◆同朋の会推進部門

#### 育成員研修会

(六月二十七日)

テーマ 関係性の再構築

講師 富田 富士也 氏

(教育心理カウンセラー

子ども家庭教育フォーラム代表)

家庭とは、

・等身大の自分をさらけ出せる場

・安心して居れる場

・心が還る家

であると。「還る家」とはハウスではなくホームである。また「家族(家庭)はせめぎ合って、折り合って、お互いさま」と先生は言われました。

また、「きく」ということに

聞くーヒアリング

|| 言葉を聞く

聴くーリスニング

|| 言葉の後の余韻(言葉にならない

い言葉) 聴く

と。私たちは家族や友達の話「聞」いていますか? 「聴」いていますか?





◆東京一組 懇談会

(六月二十九日)

今回の東京一組の懇談会は靖国神社を見学に行きました。また、靖国神社の博物館「遊就館」や千鳥ヶ淵戦没者

墓苑にも行きました。

僕は初めて靖国神社に足を踏み入れましたが、遊就館の展示品・資料を見た時は多くを考えさせられました。特に感想や意見を自由に書ける記述ノートは、いろいろな方の靖国に対する思いや意見が書かれており、あらためて自分自身が靖国問題を考える必要があると思いました。

◆児連 サマーキャンプ

2006

(七月二十六日～二十八日)

場所 神奈川県立足柄ふれあいの村

東京教区の児連が開催するキャンプです。子どもたちと一緒にカレーを作ったり、ハイキングをしたり、お勤めをしたり、今年は四年ぶりにキャンプファイヤーもできてよかったです。

ちなみに、僕の姪・甥の里菜と創大もサマーキャンプ初参加でした。

(以下、副住職の感想)

今回の児連サマーキャンプは子どもたちの参加者が多く、大いに賑わいました。僕は高学年の男の子班の班担になりました。最初は男の子たちの活発な姿が、自分が子どもだったときに児連に参加していた面影とかさなり、微笑ましく思っていました。しかし僕は途中から、活発すぎる男の子たちに対して余裕を持った接し方が出来なくなってしまう、大変な思いをしていました。そんなときに、進行スタッフのひとりの方の感話で、「子供たちが元気よく走っている姿が輝いて見える」と言う一言にとっても考えさせられました。

僕は「危ないから走るな」とばかり言っていました。スタッフの立場が違うから子どもたちの見え方も違うのかもしれないですが、子どもたちは自分のありのままを素直に表現しているのに、大人の立場や見方で子どもたちの見えかたが違うこと、またいつの間にか自分の枠に子どもたちをはめようとして

いるのではないかと、いろいろと考えさせられました。

まあ、子どもたちのすること全てを受け入れることは出来ませんが、これからは子どもたちが見せてくれる姿からいろいろと感じて、学んでいきたいと思っています。

『ネットワーク9』二〇〇六年十月号

(真宗大谷派東京教区委員会発行)

「涌」(スタッフコラム) 掲載記事より



→ みんなでハイキング  
歩いた後の  
おにぎりは最高

↑力を合わせて作った  
カレーライス  
いただきまーす

児連だよ  
全員集合 ↓



# お寺の予定

## ◆本明寺改築計画

(平成十八年十一月)

平成十九年九月

本明寺は明治四十二年に曾祖父本田鳳賢が家族を伴い新潟県より上京して以来、明治四十三年八月の大洪水、大正十二年九月の関東大震災(建物消失)、昭和二十年三月の東京大空襲(建物消失)など幾多の災難を乗り越え約一〇〇年になろうとしています。

現在の本堂は昭和三十六年に当時のご門徒の尽力により建立され、約五十年が経ち今日に至っています。しかしながら、建物に老朽化と使い勝手の不便さなど将来に亘っての利用を考え建て直しを考慮する時期が来たように思います。本年度の責任役員会および総

代会において改築計画を提案させていただきます。承を得ることができました。

つきまして、ご寄付のご依頼をお願いいたしましたところ、早速のご寄付を頂いております。篤く御礼申しあげます。

今回の本明寺改築にあたり、本明寺での行事は工事終了までお休みさせていただきます。このコーナーを本明寺改築報告の場にしようと思っております。工事の進具合などを写真と共に報告していきたいと思っております。どうぞお楽しみください。



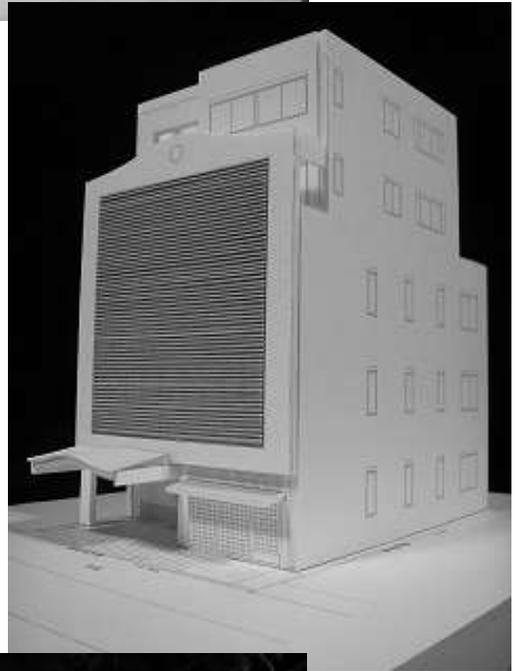
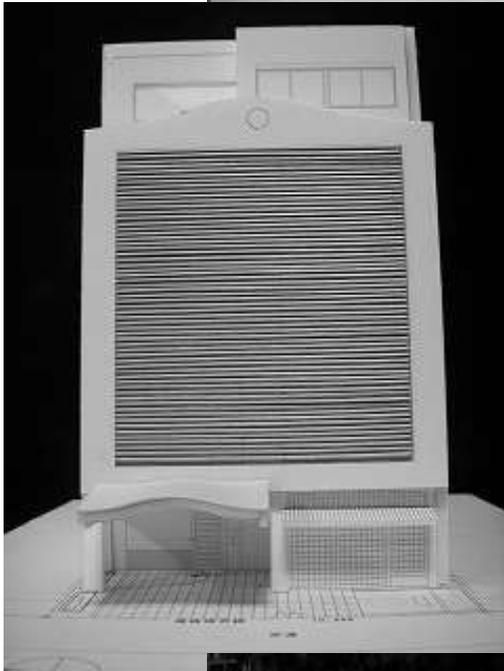
→ 工事前の本明寺です  
正面から撮影

↑ 新潟県より上京した  
初代本明寺住職 本田鳳賢です

完成予定の模型を  
作ってもらいました ↓  
正面から撮影(西側)



← 現在の本堂です



→ 八月三十一日  
建築計画の  
看板が貼られました



↑ 違う角度からも撮影  
(南西側)

# 東京教区の予定

## ◆東京教区報恩講

(平成十九年

一月二十六日～二十八日)

二十六日(金)

帰敬式

帰敬式とは、真宗の教えを聞いていくことを誓う、生涯にただ一度の大切な儀式です。帰敬式を受式すると『法名』をいただきます。『法名』というと死後にいただく名前と思っておられるかとも多いかと思いますが、本当は「私は仏弟子として生きていきます」という決意の名前です。私たちがお念仏の道をあゆむ仏弟子として、聞法の生活を実践していくことを願い、帰敬式が開かれます。

日程 10:00 受付

10:30 開式

16:00 終了

会場 東本願寺『真宗会館』

冥加金 20,000円

(当日、受付にてご納入ください)

法話 樋崎 成俊 氏

(茨城一組 妙安寺住職)

締切 平成十八年

十二月二十一日 必着

申込先 本明寺

又は

東本願寺『真宗会館』

副住職もスタッフとしているので安心してお申込ください。

また、ご不明な点等がありましたらお問い合わせください。

二十七日(土)

速夜法要

日程

11:30 受付・お斎

12:45 開会

13:00 記念講演

今井 雅晴 氏

(筑波大学教授)

15:00 勤行(速夜)

法話

三橋 尚伸 氏

(東京三組 教證寺)

18:00 寄り合い談合

19:30 懇親会



二十八日(日)

晨朝・日中法要

日程

8:00 勤行(晨朝)

法話

齋藤 信也 氏

(東京八組 眞教寺)

10:00 受付

10:30 記念講演

今井 雅晴 氏

(筑波大学教授)

11:30 お齋

12:45 勤行(日中)

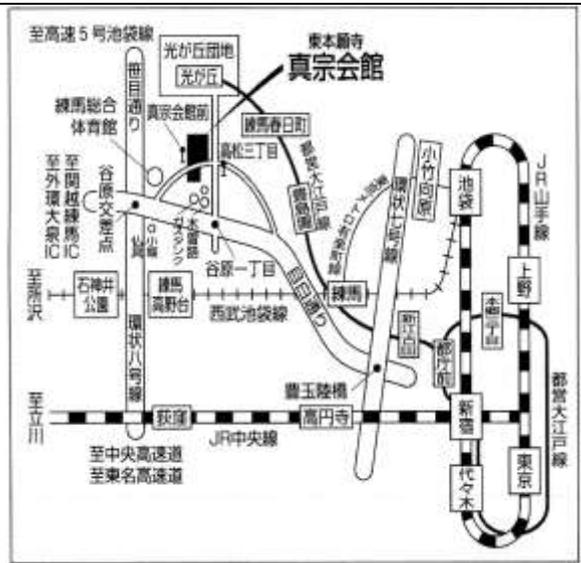
法話

田村 晃洋 氏

(茨城二組 専照寺)

16:00 散会

※お齋の都合がございますので、参詣  
されます方は、お寺までお申し込み  
ください。



●西武池袋線・都営大江戸線

「練馬駅」(北口)より

西武バス成増行十五分

「高松三丁目」下車 徒歩一分

●西武池袋線「練馬高野台駅」より

タクシー五分

●都営大江戸線「光が丘駅」より

タクシー五分

東本願寺『眞宗会館』

〒177-0032

東京都練馬区谷原一-三-七

TEL 03-5393-0810

FAX 03-5393-0814

E-mail tokyo@ji-n.net

URL <http://www.ji-n.net/>







# 素朴なQ&A

日頃お参りに伺った時に、様々な質問をされます。しかし、自分自身が勉強不足なのか、その質問に対して今まで疑問に思わなかったのか、即答できないことが多いです。その質問をそのままにしているもダメだと思うので、自分なりに調べ、後日紙面にて回答するようにしています。

また、日頃疑問に思っているも、「こんな質問をして失礼じゃないか」とか、「こんな質問するのが恥ずかしい」と、思っている方が多いのではないのでしょうか。

このコーナーは今まで受けた質問と副住職なりの回答を紹介したいと思えます。そして、同じ疑問を抱えていた方の解消と、新たな疑問が生まれるきっかけになつたらいいなと思います。

## Q：打敷（ウチシキ）について

A：打敷は平常は掛けません。お内仏（お仏壇）の引出しの中などに軽く畳んでしまっておいてください。打敷を掛けるときは、

- ① 祥月命日以上の年忌法要
- ② 中陰法要（亡くなられた日から四十九日まで）

③ 修正会（正月）

④ 春秋彼岸

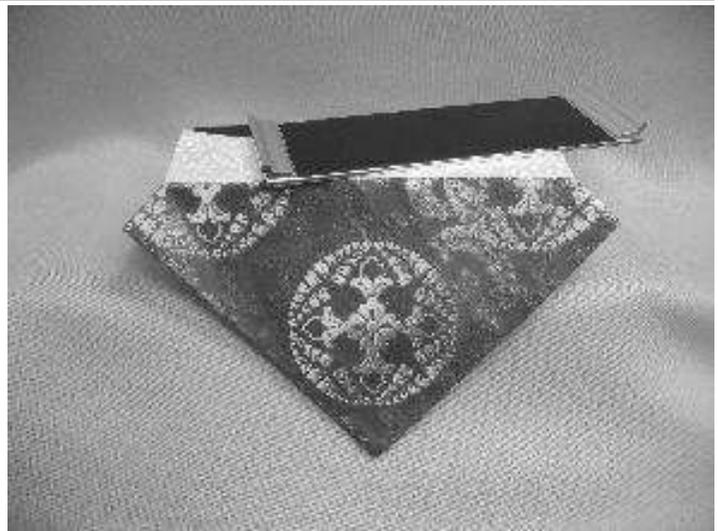
⑤ お盆

⑥ 報恩講

⑦ 結婚式

などです。②の中陰法要には、白地の打敷を 掛けますが、ご用意の無い場合には便宜上、通常の打敷を裏返して使用することも可能です。

法要によつて打敷の規定はありませんが、なるべくその法要にふさわしい図柄・色目のものを用いるのが望ましいと思います。



※疑問に思っていることがありましたら、遠慮なく質問ください。

## ホームページ開設のお知らせ



本明寺のホームページを開設します。

どのような内容になるのかまだ決めていませんが、まずは本明寺の紹介と、改築の様子をのせたいと思っています。まめに更新できないと思いますが、たまに覗きにきてください。

平成18年11月1日スタート（予定）

<http://www1.ttcn.ne.jp/~honmyouji/>

# お知らせ

◆平成十九年（二〇〇七年）は左記の年に命終された方の年忌にあたっていますので、お知らせいたします。

平成 19 年 (2007 年)	
回忌	命終された年
1 周忌	平成 18 年 (2006 年)
3 回忌	平成 17 年 (2005 年)
7 回忌	平成 13 年 (2001 年)
1 3 回忌	平成 7 年 (1995 年)
1 7 回忌	平成 3 年 (1991 年)
2 3 回忌	昭和 60 年 (1985 年)
(2 5 回忌)	昭和 58 年 (1983 年)
2 7 回忌	昭和 56 年 (1981 年)
3 3 回忌	昭和 50 年 (1975 年)
5 0 回忌	昭和 33 年 (1958 年)
7 0 回忌	昭和 13 年 (1938 年)
1 0 0 回忌	明治 41 年 (1908 年)

◆改築に中の仮住まいについて  
仮住まいの住所  
〒130-0022

東京都墨田区江東橋一・八・十一

宝田方

郵便は転送されるようにします。また、電話・ファックスも今までの番号から転送されるようになります。



## あとがき

五月に『明』を創刊した時は、半年に一回発行の予定でした。しかし、半年の間にあつた事や、これからの予定を載せたところ、今回は二十頁という分量になってしまいました。また、まめに記事を書いていなかったのも、手帳とノートを見ながら半年の間に何をしたらかを必死に思い出し記事を書きました。これからはまめに記事を書き溜めて次号に臨みたいと思います。また、半年に一回ではなくもう少し早いペースで発行しようと思いました。

発行 真宗大谷派 本明寺  
副住職 本田 彰一（釋 彰一）  
〒130-0012

東京都墨田区太平二・七・一  
TEL 03-3623-1536  
FAX 03-3623-1538

E-mail honmyouji@mx1.ttcn.ne.jp  
URL

http://www1.ttcn.ne.jp/~honmyouji/